

リヤカー付き三輪自転車で全国移動書店

小児まひの後遺症がある出版社の社長が同年の夢をかなえ、リヤカー付き三輪自転車で全国行商の旅に出る。中東区日本橋で児童出版社を設立する白井隆之さんと、札幌市、とろろ村大森中江島に合おせたオースターズで、後部を本棚にした移動書店だ。8月の札幌デビューを前に、新報記者が訪ねた。

立川市の自宅に古い国営前相模原公園、雨上がりの午後、白井さんはペダルに力をこめる。「一瞬を切って走ると、こんなに気持ちいいんだ」。汗だくの顔をこしゅくしゅくして笑う。

白井さんは生後間もなく小児まひになり、手足が自由に動かなくなった。学生時代に文学にのめりこみ、出版社を設立して35年。命の素直らしさをテーマに、世に出した本は約3500冊に上る。

新刊をリユックで書い全国行商するのが長年のスタイル。でも年とともに体力も衰える。「移動図書館があったら、もっとたくさんの本を手にとってもらえるのに」と思ってきた。そして昨年、九州

を行動中に見た。札幌で、札幌市南區南中江島の中村製菓が特注の三輪自転車を発注しているのを知った。

それから中村製菓社長(有)と白井さんの二人、即ち船に乗る。まひのある体はリヤカーに座ると動き、目的地の「輪中」は転倒してしまう。ペダルから足が離れていけない。転倒を止めない。試作を重ねるたびに難題が起る。完成までに10年。製菓社社長が白井さんは手足の筋力をつけるため、朝2時のジム通いを続けた。

完成した機体はペダルにベルトをつけ、重なくけるようになった。後部は屋根つきの白い本棚で、車行本約10冊を並べられる。行きたい地域にフェリーや引越し車で事前に運び、地域を回りながら公園や街角で止まって店舗を開く。

「僕を見て、障害のある子どもが世界を広げるきっかけにもなるといいな」。8日からは1日まで、札幌の大森公園で「本の産地直送」と題したのぼりを立てているという。

【札幌市美】



小児まひ後遺症の出版社社長・白井さん あすから札幌で